## 9　その他②（音読指導を通して漢字の読みに迫る指導）
## ～教材文との出合いからまとめるまでの音読指導～（５・６年）

### 1　はじめに

高学年になると、低学年の頃はあれほど熱心に行っていた「本読みカード」がなくなったり、あったとしても、形骸化したりしがちではないだろうか。音読によって漢字が正しく読めるかどうか確かめることができるので、音読練習を大切にしたい。

### 2　国語以外の教科でも音読を大切に

国語以外の教科書も、「漢字の読み」に気を付けながら音読させたい。一斉読みや指名読みを行う。

音読を通して、漢字を正しく読むことを意識付けさせたい。

### 3　新しい教材文との出合いを大切に

授業の中で行う「一文読み」。一つの教材を読み通すのに多くの児童に読む機会を与えることができる。また、順番で行うため「心の準備」ができ、児童の負担も減らせるので、手軽に実践できる方法の一つである。

前日に「一文読み」を行うことを予告しておく。

まず、教師が範読し正しい漢字の読み方や言葉のまとまりが意識できるようモデルを示す。その後、座ったまま次々に一文ずつ読んでいく。

二回戦では、つまずいたり、漢字が読めなかったりしたら「立つこと」などの約束事を決めておく。ただ、立ったときに「ううん、残念、長いところ当たったからね。それでもここまで読めたら、立派です。」というように担任がフォローし、あくまでも次回への挑戦意欲の高揚を図る。

学級集団が「一文読み」に慣れてくるとゲーム感覚で楽しめ、読みの苦手な児童が立たずにすめば自信につながる。教材文がすべて読み終わるまで繰り返す。

※　音読を通して、新出漢字の読みや読み換えの漢字の読みを確認する。その際、振り仮名は付けさせず、読み方が不安な児童はサイドラインを付けさせ意識させる。

### 4　授業のスタートに既習ページの音読を

授業のスタートに、既習ページの音読から始めることもひとつのアイディア。指名音読で、長さも一文単位ではなく、形式段落の一～三段落分と幅をもたせる。読み終えたら、簡単なコメントで励ます（「すらすら読めているね」「もう少しゆっくり読むといいね」等）。前者が褒められるので、次者候補には緊張感が走る。「本読みカード」の成果を見る上でも有効。

### 5　単元の最後は朗読大会で

単元の最後は朗読大会で終える。時間をかけ過ぎると長続きしないので、一時間で全員が終える長さの範囲を読ませる。形式段落二～四段落分の長さが適当。

児童に応じて読む場所は担任がその場で決める。朗読の得意な児童は会話文の難しそうなところを、苦手な児童には単元の初めの方の部分を読ませるなど工夫し、読み終えた児童一人一人に簡単な励ましのコメントを送る。

どこを読まされるか分からないことから、どの児童もしっかり練習して臨むことが期待できる。